

古代キリスト教の神学者アウグスティヌスに「私に誰も問わなければ、私は時間とは何かを知っているが、時間とは何かを問われ説明しようとする、私は時間とは何かを知らない」という有名な言葉があつて、時間とはなにかということとは古代から謎にみちみちていて、それは科学的な問いでもあり、哲学的な問いとしても現在もなお考えつづけられている。本誌でも南原充士さんが『時間論』と題して連載をつづけている。

NHKの番組では科学的な時間についての考察を網羅したものであまり新鮮さはなかった。

かつて時間の速度は同じだとおもわれていたが、アインシュタインは、光の速さに近いスピードで動いているものは止まっている人の世界から見ると時間が遅く流れる、とSF小説でもおなじみになった光と時間の関係をときあかした。『猿の惑星』という映画では準光速運行していた主人公たちは二〇〇〇年後の地球に戻ってくる話である。

まあ、そんなにおおげさな話でなくとも、日常生活で動いている人たちの時間は動いていない人たちの時間よりゆっくり流れているのだが、その誤差があまりにも小さすぎてその時間差を感じる事ができない。

光の速度は一定だが時間は伸び縮みする、といったアインシュタインはやつぱりすごい、とおもっていたが、最近、自由空間（物質が存在しない空間）を移動する光を減速させることに成功したらしい。もつとも実験では光の移動距離が短かい場合に限られているため、光速度不変の原理はいまのところ効力を失っていないことだが、これから先、光も伸び縮みす

る、ということになったら時間との関係はどうなっていくんだろう。

NHKの番組では光と時間の関係から始まり、情報は光によって運ばれるから光を消してしまえば時間を止めたことになり、と実験がおこなわれ、ごく短時間だが光を消すことができたとという報告や、時間の始まりはビッグバン後38万年たった「宇宙の晴れあがり」以降（それまでは光は直進できず閉じこめられていた）だという見解や、エネルギーを使い果たして死んでしまった宇宙から新しい宇宙が生まれ、そのたびに時間は止まったり動いたりしているとか、時間とは膨大な素粒子の相互作用であり、人は時間というものを概念として生み出しているのだとか、時間は「時空アトム」という極端に小さな粒子であり、その粒子が次々に生まれ積み重なっていくのが時間だ、というような物理学者のさまざまな「時間とはなにか」という見解が披露されていたが、いままでの時間にたいする科学者の総集編のようなものでちょっと期待外れだったが、まあ、時間とはなにか、というようなことは、誰々が言ったから真実である、というようなものでもないだろう。誰かの意見にちよつとだけは賛成したとしても結局は自分で考えていくしかないだろうし、それが愉しみでもある。

ベルクソンは『時間と自由』のなかで二種類の時間があると述べている。時計が等間隔に時を刻むというが（ベルクソンの時代はアナログ時計しかなかったのだが）、等間隔に時を刻む

ことができるのは空間や物質の性格でしかなく、だから時計が刻んでいる時間というのは空間化された時間である。しかし本来の時間とはそういう空間的物質的要素を排除した純粋な時間の流れ「純粋持続」というものである、と。

過去の時間である時計の時間は真の時間ではなく空間の時間であり、それとはまったく区別されるものが時間の本質である、それを「純粋持続（＝意識）」と名づけるといっている。

空間化された時間は、すでに決定され固定しているため、現在から未来への時間は純粋な時間の流れであり分割することも固定することもできない。だから、前者の時間は空間化された時間を対象とするので科学の問題であり、後者は時間の本質を对象とするから哲学の問題である、といっている。

科学の特性は、検証できる、というか、検証できなければならぬが、哲学の特性は、検証できない個人的な記述を、真実かまやかしかわからない記述を、思考として認めてしまうことで、ベルクソンはそれを「直観」といっている。

「直観」とはその言葉のとおり、直接に観る、ということ、外部からの刺激を受けて感覚器官が感じるのではなく、自分の内部から感じ取れること、純粋に自分の内部で感じとれること、ということで、科学は、流れる時間を時計を借りて量的に記述するが、その方法では空間や物質に記号を与えて、それらを記号的に記述するのみである。哲学がものの本質をとらえるのは科学的な分析によってではない。それは「直観」によってのみとらえることができる、とベルクソンはいっている。

ベルクソンは時間の本質を純粋持続だといったが、バシュールは時間の本質は持続ではなく瞬間にあると『瞬間と持続』のなかでいっている。意識する瞬間を積み重ねるときにしか時間を感じることはできない、それは能動的なもので受動的なものではない、というようなことをいっていて、時間は流れるものではなく瞬間瞬間の積み重ねであるというところからは二十二、三歳だったばかりにはとても新鮮だったことを覚えてい

る。それにしても時間とはなんだろう。